

父親の育児サポートに関する母親の認知

ナカジマ カズオ クワタ ヒロコ ハヤシ ヒトミ オカダ セツコ
中嶋 和夫*1 桑田 寛子*2 林 仁実*2 岡田 節子*3
バク チョンマン サイトウ ユウスケ ハザマ ミチオ
朴 千萬*4 齋藤 友介*5 間 三千夫*6

目的 本研究では、母親における父親の育児参加に関連したサポート認知に関する尺度開発を目的とした。

方法 調査対象は、公立保育所を利用する関東圏「M市」859人ならびに関西圏「I町」1,057人の母親であった。父親の育児関連サポートに関する母親の認知は、情緒的・手段的・情動的・評価的サポートの21項目で把握した。尺度開発は、探索的因子分析による内容的妥当性と確認的因子分析による構成概念妥当性を基礎に行った。

結果 探索的因子分析により、母親の育児サポートに関する認知は、情緒的サポート4項目、手段的サポート4項目、情動的サポート2項目で構造化できることが示された。確認的因子分析により、前記3つの因子を一次因子、また「父親の育児サポートに関する母親の認知」を二次因子とする二次因子モデルが、データに十分適合することが示された。また10項目で構成される前記尺度の信頼性係数は0.915であった。

結論 開発された「父親の育児サポートに関する母親の認知尺度」は、妥当性と信頼性を十分備えた尺度であり、今後の母親のストレスに関する因果関係を解明する上で有効に機能するものと推察された。

Key words : 育児サポート認知, 妥当性, 信頼性

I 緒 言

近年、わが国の出生率は年々低下し、1998年の合計特殊出生率は1.38を記録した¹⁾。こうした中で、政府は、1994年の「今後の子育て支援のための施策の基本的方向性について」(エンゼルプラン)と1997年人口問題審議会による「少子化に関する基本的な考え方について」の提起を受け、少子化の要因および影響への具体的な施策を労働・保健・医療・福祉・教育・住宅等の側面から展開している。それら施策は、既婚女性の職場進出に対する「育児と仕事の両立支援」と核家族化や居住の郊外化に伴う「地域で孤立した育児を行っている母親への支援」から

なり、女性の子育てに伴う負担感を軽減する社会環境の形成にねらいが置かれている。一般的に、育児は母親にさまざまなストレス反応を引き起こすとともに各自のQOLに大きな影響を及ぼすものと想定されるが、一方では、ストレス反応はソーシャル・サポートやコーピング等によって緩和されることが示唆されている^{2)~4)}。そのうちのソーシャル・サポートについては、対象を乳幼児を育児する母親^{5)~8)}に限定しても多くの報告が認められ、またそのために種々のソーシャル・サポート測定尺度^{9)~10)}が開発されている。しかし、それら測定尺度の妥当性に着目すると、内容的妥当性の検討にとどまる報告が多く、構成概念妥当性たとえば確認的因子分

* 1 岡山県立大学保健福祉学部教授

* 2 同大学院生

* 3 静岡県立大学短期大学部助教授

* 4 大韓啓明大学応用自然科学部助教授

* 5 大東文化大学教育学科講師

* 6 和歌山信愛女子短期大学講師

表1 父親の育児サポートに関する母親の認知についての回答傾向

(単位 人, ()内%)

質問項目	回答		
	期待できない	少し期待できる	とても期待できる
情緒的サポート			
育児で疲れたり悩んだりしているときに励ましてくれる	277 (26.8)	415 (40.2)	341 (33.0)
育児の精神的な支えになってくれる	125 (29.1)	176 (40.9)	129 (30.0)
育児や子どもの発達に関する心配事や悩み事があるときに、親身になって聞いてくれる	152 (25.2)	239 (39.6)	212 (35.2)
育児をしている私に気遣ったり、思いやりたりしてくれる	196 (19.0)	410 (39.7)	427 (41.3)
育児に関して私の気持ちに敏感に気付いてくれる	92 (21.4)	170 (39.5)	168 (39.1)
一緒に育児していて安心できる	104 (17.2)	240 (39.8)	259 (43.0)
子どもの発達に関する心配事や悩み事があるときに、親身になって聞いてくれる	160 (15.5)	420 (40.7)	453 (43.9)
育児をしている私に気遣ったり、思いやりたりしてくれる	83 (19.3)	170 (39.5)	177 (41.2)
育児に関して私の気持ちに敏感に気付いてくれる	77 (12.8)	250 (41.5)	276 (45.8)
一緒に育児していて安心できる	168 (16.3)	468 (45.3)	397 (38.4)
育児に関して私の気持ちに敏感に気付いてくれる	75 (17.4)	195 (45.3)	160 (37.2)
一緒に育児していて安心できる	93 (15.4)	273 (45.3)	237 (39.3)
育児に関して私の気持ちに敏感に気付いてくれる	387 (37.5)	446 (43.2)	200 (19.4)
一緒に育児していて安心できる	175 (40.7)	183 (42.6)	72 (16.7)
育児に関して私の気持ちに敏感に気付いてくれる	212 (35.2)	263 (43.6)	128 (21.2)
一緒に育児していて安心できる	111 (10.7)	485 (47.0)	437 (42.3)
育児に関して私の気持ちに敏感に気付いてくれる	47 (10.9)	216 (50.2)	167 (38.8)
一緒に育児していて安心できる	64 (10.6)	269 (44.6)	270 (44.8)
一緒に育児していて安心できる	112 (10.8)	395 (38.2)	526 (50.9)
一緒に育児していて安心できる	54 (12.6)	171 (39.8)	205 (47.7)
一緒に育児していて安心できる	58 (9.6)	224 (37.1)	321 (53.2)
手段的サポート			
子どもの授乳や食事の世話をしてくれる	236 (22.8)	418 (40.5)	379 (36.7)
おむつの替えや着替え、トイレの世話をしてくれる	95 (22.1)	174 (40.5)	161 (37.4)
家事(炊事・掃除・洗濯など)を手伝ってくれる	141 (23.4)	244 (40.5)	218 (36.2)
子どもが病気のとき看病してくれる	190 (18.4)	449 (43.5)	394 (38.1)
子どもが病気のとき看病してくれる	75 (17.4)	180 (41.9)	175 (40.7)
子どもが病気のとき看病してくれる	115 (19.1)	269 (44.6)	219 (36.3)
子どもが病気のとき看病してくれる	341 (33.0)	408 (39.5)	284 (27.5)
子どもが病気のとき看病してくれる	147 (34.2)	167 (38.8)	116 (27.0)
子どもが病気のとき看病してくれる	194 (32.2)	241 (40.0)	168 (27.9)
子どもが病気のとき看病してくれる	242 (23.4)	436 (42.2)	355 (34.4)
子どもが病気のとき看病してくれる	105 (24.4)	176 (40.9)	149 (34.7)
子どもが病気のとき看病してくれる	137 (22.7)	260 (43.1)	206 (34.2)
子どもが病気のとき看病してくれる	95 (9.2)	326 (31.6)	612 (59.2)
子どもが病気のとき看病してくれる	45 (10.5)	147 (34.2)	238 (55.3)
子どもが病気のとき看病してくれる	50 (8.3)	179 (29.7)	374 (62.0)
子どもが病気のとき看病してくれる	143 (13.8)	462 (44.7)	428 (41.4)
子どもが病気のとき看病してくれる	63 (14.7)	198 (46.0)	169 (39.3)
子どもが病気のとき看病してくれる	80 (13.3)	264 (43.8)	259 (43.0)
子どもが病気のとき看病してくれる	87 (8.4)	418 (40.5)	528 (51.1)
子どもが病気のとき看病してくれる	41 (9.5)	168 (39.1)	221 (51.4)
子どもが病気のとき看病してくれる	46 (7.6)	250 (41.5)	307 (50.9)
子どもが病気のとき看病してくれる	128 (12.4)	373 (36.1)	532 (51.5)
子どもが病気のとき看病してくれる	63 (14.7)	150 (34.9)	217 (50.5)
子どもが病気のとき看病してくれる	65 (10.8)	223 (37.0)	315 (52.2)
情報的サポート			
育児に関してアドバイスをしてくれる	198 (19.2)	513 (49.7)	322 (31.2)
育児に関してアドバイスをしてくれる	90 (20.9)	216 (50.2)	124 (28.8)
育児に関してアドバイスをしてくれる	108 (17.9)	297 (49.3)	198 (32.8)
育児に関する私の考え方が間違っているときに率直に意見してくれる	142 (13.7)	446 (43.2)	445 (43.1)
育児に関する私の考え方が間違っているときに率直に意見してくれる	70 (16.3)	189 (44.0)	171 (39.8)
育児に関する私の考え方が間違っているときに率直に意見してくれる	72 (11.9)	257 (42.6)	274 (45.4)
子どもの発達についての情報・知識を提供してくれる	367 (35.5)	440 (42.6)	226 (21.9)
子どもの発達についての情報・知識を提供してくれる	176 (40.9)	181 (42.1)	73 (17.0)
子どもの発達についての情報・知識を提供してくれる	191 (31.7)	259 (43.0)	153 (25.4)
子どもの発達についての情報・知識を提供してくれる	372 (36.0)	468 (45.3)	193 (18.7)
子どもの発達についての情報・知識を提供してくれる	175 (40.7)	195 (45.3)	60 (14.0)
子どもの発達についての情報・知識を提供してくれる	197 (32.7)	273 (45.3)	133 (22.1)
評価的サポート			
育児に関して私を必要としてくれる	85 (8.2)	377 (36.5)	571 (55.3)
育児に関して私を必要としてくれる	50 (11.6)	152 (35.3)	228 (53.0)
育児に関して私を必要としてくれる	35 (5.8)	225 (37.3)	343 (56.9)
育児に関して私を必要としてくれる	389 (37.7)	484 (46.9)	160 (15.5)
育児に関して私を必要としてくれる	174 (40.5)	209 (48.6)	47 (10.9)
育児に関して私を必要としてくれる	215 (35.7)	275 (45.6)	113 (18.7)

注 1) 上段：全体 中段：M市 下段：I町
2) **: P<0.01

析による因子構造モデルのデータへの適合度を検討した業績はほとんど見当たらない。このことは、たとえソーシャル・サポートが測定されていたとしても、その測定内容の曖昧さは払拭できず、時には緩衝効果等についても検証したことにはならないといったリスクすら否定できないことを示唆している。

本研究は、育児ストレスに強く影響すると想定されている¹⁷⁾父親の育児参加に関連したサポートを取り上げ、そのことに対する母親の認知的側面を構造化し、またそれを尺度としたときの構成概念妥当性ならびに信頼性について検討することを目的とした。

II 方法

本研究は、関東圏「M市」ならびに関西圏「I町」の公立保育所を利用するすべての母親(前者が859人、後者が1,057人)を調査対象とした。調査は平成11年10月に実施し、調査員は各保育所長とし、彼らには調査票を母親に配布するとともに、またその後、秘密厳守のための封印をほどこし

た調査票を回収し、一括して大学宛に郵送することを依頼した。

調査内容は、母親の属性と育児に関連した父親のサポートに対する認知、健康状態で構成した。属性は年齢、児の数、仕事の有無を調査した。父親の育児関連サポートは、House¹⁸⁾に従い、情緒的サポートemotional support (共感、愛情、信頼)、手段的サポートinstrumental support (援助行動)、情報的サポートinformation support (対処のための情報)、評価的サポートappraisal support (自己評価のための情報)の概念を基礎に21項目をプールした(表1)。それらの項目に対し、「(ご主人がいる方のみお答えください)子育ての上で直面した様々な問題を思いうかべ、日頃、あなたが育児する上でご主人に援助が期待できる程度について該当する回答に○印をつけて下さい」とし、回答を求めた。回答は3件法とし、「0点：期待できない」「1点：少し期待できる」「2点：とても期待できる」の選択肢を用意した。

統計解析においては、まず第一段階で、探索的な因子分析を基礎に、父親の育児関連サポートに関する母親の認知に関する因子構造モデルの開発(内容的妥当性の検討)を試みた。次いで、前記因子構造モデルの構成概念妥当性を確認的因子分析で検討した。なお、探索的因子分析に先立ち、データの内部一貫性を高める¹⁹⁾目的で、以下の手順により項目削減を行った。まず第一に、識別性の高い項目を得るために、項目別の回答頻度に注目し、周辺度数が「期待できない」もしくは「とても期待できる」のいずれかの頻度が85%以上あるいは15%未満の項目を削除した。第二に、同時複数項目削減相関係数法に従い、当該の項目得点と当該項目の得点を除く合計点との相関係数Corrected Item-Total Correlation (以下「CITC」と略す)が低い項目を削除した。このときの削除条件はCITCを0.3以下とした。第三に、前記分析で残った項目を主成分分析に投入し、第1主成分の負荷量が0.3以下の項目をすべて削除した(同時複数項目削減主成分分析)。そのうち、前記分析過程で残ったすべての項目を用い、最尤解を基

礎とする斜交回転(プロマックス法)²⁰⁾で因子解を求めた。このときの因子の解釈は、固有値が1以上の因子に着目し、かつ絶対値が0.3を超える因子負荷量を参考に行った。

次いで第二段階では、前記の探索的因子分析で得られた各因子に所属する項目以外は、因子負荷を0(ゼロ)に固定した検証モデルを措定し、そのデータへの適合度、すなわち構成概念妥当性を共分散構造分析²¹⁾を用いた確認的因子分析で検討した。このときの因子構造モデルは、潜在変数ならびに観測変数の加算性を確認するねらいから、二次因子モデルとして設定するものとした。適合度²²⁾は、標本数に影響されやすい χ^2 値等を除き、説明力の程度として適合度指標「GFI」ならびに「RMSEA」を採用し、安定性の程度として修正適合度指標「AGFI」を採用した。GFIは一般的に0.9以上、またRMSEAは0.08以下であれば、そのモデルがデータをよく説明していると判断される。またRMSEAの検定はPCLOSE close fitで行った。さらにモデルの有意性はHoelter's critical N (以下「CN」)で判断した。CNは集団がひとつのときは200より大であることが統計学的に有意なモデルの条件である²³⁾。

前記解析に加え、構成概念妥当性はソーシャル・サポートとの関連性が指摘されている精神的健康度に適切に反映されるか否かという観点からも検討した。精神的健康度は「日本版CES-D尺度」²⁴⁾Center for Epidemiological Studies Depression Scaleで測定した。CES-D尺度は、LockeとPutmannが開発した抑うつ諸症状depressive symptomatologyを測定する尺度で、米国その他の国でよく使用されている²⁴⁾。CES-D尺度に対し探索的因子分析を最初に行ったRadloff²⁴⁾は、4つの下位因子(うつ感情、ポジティブ感情、身体的症状、対人関係)を見いだし、その後それは欧米ならびにわが国の高齢者において構成概念妥当性が確認されている²³⁾²⁵⁾²⁶⁾。なお、精神的健康度に関する資料は関東圏「M市」のみで得られた。前記の要素間の関連性は共分散構造分析で検討した。なお、開発された尺度の信頼性はクロンバックの α 信頼

表2 父親の育児サポートに関する母親の認知因子構造モデル

	CITC ^a	第一主成分 分負荷量 ^b	因子と因子負荷量 ^c					
			I	II	III	IV	V	
X ₁ : 育児で疲れたり悩んだりしているときに励ましてくれる	0.804	0.851	0.998					-0.260
X ₂ : 育児の精神的な支えになってくれる	0.789	0.837	0.888					
X ₃ : 育児や子どもの発達に関する心配事や悩み事があるときに、親身になって聞いてくれる	0.713	0.770	0.815					0.189
X ₄ : 育児をしている私に気遣ったり、思いやったりしてくれる	0.775	0.822	0.728	0.157				
X ₅ : 育児に関して私をほめてくれる	0.628	0.688	0.494			0.130	0.101	-0.103
X ₆ : 育児に関してアドバイスをしてくれる	0.685	0.743	0.434			0.267		0.177
X ₇ : 子どもの授乳や食事の世話をしてくれる	0.670	0.713		0.916				
X ₈ : おむつの替えや着替え、トイレの世話をしてくれる	0.610	0.658		0.788				
X ₉ : 家事(炊事・掃除・洗濯など)を手伝ってくれる	0.545	0.597		0.662				
X ₁₀ : 子どもが病気のとき看病してくれる	0.661	0.711	0.185	0.462				
X ₁₁ : 子どもの発達についての情報・知識を提供してくれる	0.683	0.738				0.973		
X ₁₂ : 育児についての情報・知識を提供してくれる	0.679	0.733				0.863		
X ₁₃ : 育児に関しての私の気持ちに敏感に気付いてくれる	0.692	0.751					0.951	

注 a : Corrected Item Total Correlation
 b : 主成分分析の因子負荷量
 c : 最尤法を用いた斜交回転(プロマックス法)によるパターン行列: 因子負荷量0.1以上のみの数値を記載

性係数で検討した。

以上の解析において、探索的因子分析や信頼性等の分析には「SPSS」を、また確認的因子分析等の共分散構造分析では「AMOS」²²⁾を用いた。また集計対象は、回収された1,271人(回収率66.3%)の回答のうち、年齢、児の数、仕事、育児関連サポートのすべての項目に欠損値を有さない1,033人とした。

Ⅲ 結 果

(1) 基本属性等の分布

集計対象1,033人の平均年齢は32.6歳、標準偏差4.37、範囲22～52歳であった。児の数は平均で2.05人、標準偏差0.75、範囲1～6人であった。いずれも「M市」と「I町」で統計学的な有意差はなかった。職業については、正社員が236人(22.8%)、パートタイムが531人(51.4%)、専業主婦が239人(23.1%)で、「M市」が「I町」に比して正社員(「M市」が41.9%、「I町」が13.8%)が多く、主婦が少ない(「M市」が4.9%、「I町」が36.2%)傾向にあった。

父親の育児サポートに関連する母親の認知状況は表1に示した。「M市」と「I町」で分布に統計学的な差がみられたのは5項目で、それは「子どもの発達についての情報・知識を提供してくれる」「育児に関して私を必要としてくれる」

「育児についての情報・知識を提供してくれる」「育児や子どもの発達に関する心配事や悩み事があるときに、親身になって聞いてくれる」「育児に関して私をほめてくれる」であった。

なお、関東圏「M市」において実施した「日本版CES-D尺度」の得点は(419人)、平均14.0点、標準偏差10.0、範囲0～53.0点に分布していた。

(2) 探索的因子分析による因子構造モデルの検討

探索的因子分析に先立ち、識別性を高めるねらいから、通過率に注目し周辺度数が85%以上もしくは15%未満となっていた8項目を除外し、残りの13項目のCITCを求めた(表2)。CITCが0.3以下の項目は皆無で、その範囲は0.545～0.804であった。次いで、それらをすべて主成分分析に投入した。ただし第1主成分の因子負荷量が0.3以下となる項目は観察されず、その範囲は0.597～0.851となっていた(表2)。次いで、最尤解を用いる斜交回転(プロマックス法)で因子解を求めた。このとき最適解が得られるまで因子数を増加させたところ、5因子が抽出できた(表2)。

第1因子の因子負荷量に着目すると、0.3以上の数値を示していたのは「育児で疲れたり悩んだりしているときに励ましてくれる」「育児の精

精神的な支えになってくれる」「育児や子どもの発達に関する心配事や悩み事があるときに、親身になって聞いてくれる」「育児している私に気遣ったり、思いやったりしてくれる」「育児に関して私をほめてくれる」「育児に関してアドバイスをしてくれる」の6項目であった。「育児に関して私をほめてくれる」と「育児に関してアドバイスをしてくれる」を除くと、この因子は「情緒的サポート認知」と解釈できた。

第II因子の因子負荷量で0.3以上の数値を示していたのは、「子どもの授乳や食事の世話をしてくれる」「おむつの替えや着替え、トイレの世話をしてくれる」「家事（炊事・掃除・洗濯など）を手伝ってくれる」「子どもが病気のとき看病してくれる」の4項目で、すべて手段的支援から構成されていたことから、この因子は「手段的サポート認知」と解釈できた。

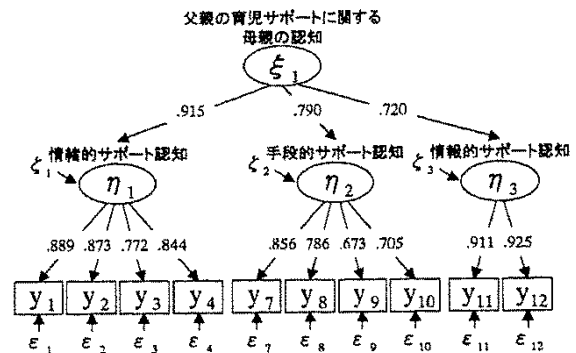
第III因子で0.3以上の因子負荷量を示したのは「子どもの発達についての情報・知識を提供してくれる」「育児についての情報・知識を提供してくれる」の2項目で、この因子は「情報的サポート認知」と解釈できた。

第IV因子において、0.3以上の因子負荷量を示したのは「私の気持ちに敏感に気付いてくれる」のみであった。また第V因子では、因子負荷量が0.3以上の項目は観察されなかった。

(3) 確認的因子分析による因子構造モデルの適合度の検討

前記解析を基礎に、本研究では3つの一次因子から構成される二次因子構造モデルを構定した(図1)。すなわち「情緒的サポート認知」には「育児で疲れたり悩んだりしているときに励ましてくれる」「育児の精神的な支えになってくれる」「育児や子どもの発達に関する心配事や悩み事があるときに、親身になって聞いてくれる」「育児をしている私に気遣ったり、思いやったりしてくれる」の4項目を配置した。また「手段的サポート認知」には「子どもの授乳や食事の世話をしてくれる」「おむつの替えや着替え、トイレの世話をしてくれる」「家事（炊事・掃除・洗濯など）を手伝ってくれる」「子どもが病気の

図1 父親の育児サポートに関する母親の認知因子構造モデル(標準解)



とき看病してくれる」の4項目を配置し、「情報的サポート認知」には「子どもの発達についての情報・知識を提供してくれる」「育児についての情報・知識を提供してくれる」の2項目を配置した。このときの二次因子の名称は「父親の育児サポートに関する母親の認知」とした。

前記因子構造モデルのデータへの適合度を、共分散構造分析で検討したところ、GFIは0.975、AGFIは0.957、RMSEAは0.055(PCLOSE=0.198)、CNは364(5%有意水準)となった。このときの潜在的因子(第一次因子)から観測変数への標準化係数(以下、「パス係数」)は、いずれも正値であって、「情緒的サポート認知」は0.772~0.889、「手段的サポート認知」は0.673~0.856、「情報的サポート認知」は0.911~0.925の範囲にあった。棄却比であるF値はすべて1.96(5%有意水準)以上であった。

(4) 父親の育児サポートに関する母親の認知と精神的健康度との関連性の検討

前記分析で得られた二次因子モデルを独立変数、「CES-D」得点を従属変数とする因果関係モデルを設定し、全標本を用いて、そのモデルの適合度と寄与率を共分散構造分析で検討した。その結果、CES-D得点に対する「父親の育児サポートに関する母親の認知」の寄与率は14.3%となり、また「情緒的サポート認知」とCES-D得点の相関は-0.341、「手段的サポート認知」とCES-D得点の相関係数は-0.294、「情報的サポ

ート認知」とCES-D得点の相関係数は-0.241となっていた。このときの適合度は、GFIが0.961, AGFIが0.938, RMSEAが0.054, PCLOSEが0.318であり、また相関係数(パス係数)はすべて統計学的に有意な水準にあった。

(5) 「父親の育児サポートに関する母親の認知尺度」の信頼性と得点分布の検討

以上の解析から、著者らは10項目から構成される前記サポートの測定尺度を「父親の育児サポートに関する母親の認知尺度」と命名し、信頼性係数について検討した。クロンバックの α 信頼性係数を求めたところ、10項目全体で0.915、「情緒的サポート因子」が908、「手段的サポート因子」が837、「情動的サポート因子」が0.914であった。

また、各質問項目の素点の合計点に関する分布を見ると、標本全体で「父親の育児サポートに関する母親の認知」得点の平均は10.9点(標準偏差5.58)で、尖度は-0.963, 歪度は-0.094となった。これを因子別にみると、「情緒的サポート認知」の平均得点は4.8点(標準偏差2.60), 「手段的サポート認知」の平均得点は4.4点(標準偏差2.47), 「情動的サポート因子」の平均得点は1.7点(標準偏差1.41)であった。

IV 考 察

本研究では、Houseの報告¹⁷⁾に従い、情緒的・手段的・情動的・評価的サポートに関する概念を基礎として父親の育児に関するサポートのアイテム・プールを作成し、調査を行った。関東圏「M市」ならびに関西圏「I町」の保育所を利用するすべての母親の資料を用い、父親の育児サポートに関する母親の認知に関する因子構造モデルを探索的因子分析で検討し、加えてその構成概念妥当性を検討した。構成概念妥当性の検討のひとつとして確認的因子分析を採用したが、この解析方法は理論的に立てられたモデルを実際のデータに当てはめ、適合度の検定を通してモデルの妥当性の検証を行うものである。本研究で確認的因子分析を採用したことは、探

索的因子分析において観察される因子の抽出と解釈の際の恣意性・曖昧さが避けられることから妥当な選択であったと判断される。また一方で、開発された尺度と精神的健康度との関連性で検討したことも、構成概念妥当性を検討する上で妥当な方法であったと推察される。

その結果、まず第一に、探索的因子分析により、父親の育児サポートに関する母親の認知は3つの潜在変数(因子)によって(「情緒的サポート認知」「手段的サポート認知」「情動的サポート認知」)で構造化できることが示された。このときの因子の解釈は、絶対値が0.3を越える因子負荷の推定値に基づいて行った。次いで、著者らは絶対値が0.3以下の因子負荷量は有意に0(ゼロ)から離れておらず誤差変動とみなせ、また共通因子は観測変数には影響しないと判断できることに立脚して、絶対値が0.3以下の因子負荷を0に固定した検証モデルを二次因子モデルとして測定し、データへの適合度を検討した。適合度の判断に用いたGFI, AGFI等の指標はすべて統計学的な許容範囲にあった。また、各潜在変数から観測変数に向かうパス係数はすべての因子において正值で、しかもその値は高く、独自因子の負荷量は小さなものであった。このことはいずれの観測変数も適切に母親の認知状況を反映する項目であることを示唆するものである。なお、「父親の育児サポートに関する母親の認知尺度」の信頼性は統計的にも許容される範囲にあった。さらに総合得点の分布における尖度および歪度はともに0付近の数値を示し、正規性に近いものとなっていた。このことは父親の育児サポートに関する母親の認知得点が低い者を統計学的な基準に沿って、一定の確率で抽出しやすいことを示唆しており、その意味でも「父親の育児サポートに関する母親の認知尺度」の有用性が支持されたものと推察された。

次いで、本研究では前記尺度の総合得点と精神的健康度として測定した「CES-D」得点との関連性を検討した。その結果、これらふたつの概念間の関連性が認められ、またCES-D得点に対する父親の育児サポートに関する母親の認知得点の寄与率は14.3%となり、さらにサポート

認知の下位因子の「CES-D」得点に対する関連性も統計学的な許容水準を満たすものであった。このことは、これまで指摘されてきたソーシャル・サポートと精神的健康度の関連性^{5)~8)}を支持するものであり、また前記尺度の構成概念妥当性を裏づけるものである。従来の研究²⁸⁾によれば、育児場面で起こるさまざまな出来事は、母親にとってのストレス症状を引き起こす潜在的ストレスラーとして位置づけられる。さらに母親が潜在的ストレスラーを自分にとってネガティブなものだと評価する(負担感や不安感)なら、その結果として母親に心理的・身体的なストレス症状が生ぜしめことになるが、そのストレス症状を緩和するためにコーピングやソーシャル・サポートが機能すると想定されている。育児負担等から生じるソーシャルサポートのストレス反応に対する緩衝効果は本研究では主題としなかったが、ソーシャル・サポートの精神的健康状態に対する関連性が明らかにできたことは大きな成果であり、特に、情緒的サポート、手段的サポート、情動的サポートの順で影響度が異なることが明らかにできたことは、今後の緩衝効果の有無やその程度を解明する上で、重要な知見であると推察された。

本研究で開発された「父親の育児サポートに関する母親の認知尺度」の妥当性をさらに高めるためには、複数個の母集団たとえば文化の異なる標本や発達状態が異なる児を育児している母親の標本に適用し、同一の因子(潜在変数)が想定できるか否かすなわち因子不変性 factorial invariance²⁹⁾の水準で検討する必要がある。また基準関連妥当性についても判別的妥当性や予測的妥当性の検討も今後の課題となろう。加えて、そのような尺度の適切な評価の後、あらためてソーシャルサポートの緩衝効果に関する慎重な検討が望まれる。

文 献

- 1) 厚生省監修：厚生白書—少子社会を考える—。東京：ぎょうせい、1998。
- 2) Broadhead WE, Kaplan BH, James SA, et al. The epidemiologic evidence for a relationship between social support and health. *Am J Epidemiol* 1983 ; 117 : 521-37.
- 3) Cohen S, Wills TA. Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychol Bull* 1985 ; 98 (2) : 310-57.
- 4) Alloway R, Bebbington P. The buffer theory of social support-A review of the literature. *Psychol Med* 1987 ; 17 : 91-108.
- 5) Hopkins J, Marucus M, Cambell B. Postpartum depression : A critical review. *Psychol Bull* 1984 ; 95 (3) : 498-515.
- 6) Gjerdingen DK, Olmsted MP, Garner DM. The effects of social support on women's health during pregnancy, labor and delivery, and the postpartum period. *Family Medicine Special Articles* 1991 ; 23 (5) : 370-5.
- 7) Anderson PA, Teleen, SL. The relationship between social support and maternal behaviors and attitudes : A meta-analytic review. *Am J Community Psychol* 1992 ; 20 (6) : 753-74.
- 8) 田中宏二, 難波茂美. 育児ストレスにおけるソーシャル・サポート研究の概観. 岡山大学教育学部研究集録 1997 ; 104 : 177-85.
- 9) O'Hara MW, Rehm LP, Campbell SB. Postpartum : A role for social network and life stress variables. *J Nerv Ment Dis* 1983 ; 171 : 336-41.
- 10) Koeske GF, Koeske RD. : The buffering effect of social support on parental stress. *Am J Orthopsychiatry* 1990 ; 60 (3) : 440-51.
- 11) Logsdon MC, Usui W, Birkimer JC, et al. The postpartum support questionnaire : Reliability and validity. *J Nurs Meas* 1996 ; 4 (2) : 129-42.
- 12) Norwood SL. The social support appar : Instrument development and testing. *Res Nurs Health* 1996 ; 19 : 143-52.
- 13) Hisata M., Miguchi M., Senda S, et al. Childcare stress and postpartum depression-An examination of the stress-buffering effect of Marital intimacy as social support. *社会心理学研究* 1990 ; 6 (1) : 42-51.
- 14) 福島道子, 吉田真司, 畑山伊佐枝. 母親の育児に

- 対する社会的支援. 小児保健研究 1991 ; 50(5) : 602-6.
- 15) 新田紀枝, 藤岡千秋. 幼児をもつ母親の心身の状態とソーシャル・サポートとの関係. 大阪府立大学看護大学紀要 1997 ; 3(1) : 65-73.
- 16) 武田文, 宮地文子, 山口鶴子, 他. 産後の抑うつとソーシャルサポート. 日本公衛誌 1998 ; 45(6) : 564-71.
- 17) Gotlib IH, Whiffen VE., Wallace PM. et al. Prospective investigation of postpartum depression : factors involved in onset and recovery. J Abnorm Psychol 1991 ; 100(2) : 122-32.
- 18) House JS, Robbins C, Metzner HL. The association of social relationships and activities with mortality. Am J Epidemiol 1982 ; 116 : 123-40.
- 19) 服部環. テストの内部一貫性を大きくするための項目選択技法. 教育心理学研究 1991 ; 39 : 195-203.
- 20) 柳井晴夫, 繁樺算男, 前川眞一, 他. 因子分析—その理論と方法—. 東京: 朝倉書店, 1990.
- 21) 豊田秀樹. 共分散構造分析入門編: 構造方程式モデリング. 東京: 朝倉書店, 1998.
- 22) Arbuckle JL. Amos user's guide version3.6. Chicago : SmallWaters Corporation, 1997.
- 23) 矢富直美, Jersy Liang, Neal Krause, et al. CES-D による日本老人のうつ症状の測定—その因子構造における文化差の検討—. 社会老年学 1993 ; 37 : 37-47.
- 24) Radoff LS. The CES-D scale : a self-report depression scale for research in the general population. Appl Psychol Meas 1977 ; 1 : 385-401.
- 25) Davidson H, Feldman PH, Crawford S. Measuring depressive symptoms in the elderly. J Gerontol 1994 ; 49(4) : 159-64.
- 26) McCallum J, Mackinnon A, Simons L, et al. Measurement properties of the Center for Epidemiologic Studies Depression Scale : an Australian community study of aged persons. J Gerontol 1995 ; 50B(3) : 182-9.
- 27) 中嶋和夫, 齋藤友介, 岡田節子. 母親の育児負担感に関する尺度化. 厚生」の指標 1999 ; 46(3) : 11-8.
- 28) Joreskog KG. Simultaneous factor analysis in several populations. Psychometrika 1971 ; 36(4) : 409-26.